

# 親しむ心

倉橋惣三

一

大勢の子供の中で、時々斯ういふ子供に會ふことがある。其の時私の心は、丁度胸の中へ何かの塊りでも出来たように重苦しくなる。ちつと其の子を凝めながら、見るのも苦しく、見ぬのも苦しいと言つた様な妙な心持ちになる。——私は斯う書いて來て、あのバーンスの有名な詩を思ひ出した。それはバーンスの目の前をこそくと逃げてゆく野鼠に對して歌はれた詩である。敏感なバーンスは、その野鼠の、自分を怖れて逃げてゆくのがつらかつた。そうして、人間の世界にある無情が、こんな罪もない野鼠に、何といふこともなく人を怖れさせることを、野鼠には憐れに、自分には悲しく思つた。『まあお前、どうして、そんなに

怖れるのか』といつた心持が、こまかい感情に充ちた詞句で歌はれてある詩である。

つらい、つらい。しかも人間同志。しかも無邪氣な子供であるのに。勿論野鼠の様におち怖れては居ないが、何故もつと懐しく飛びついて來ないのか。何故もつと親しく抱きついて來ないのか。せめては、何故もつと心おきなく私を受取つては呉れないのか。なんにもそんなに額を重くすることはないではないか。目を暗くすることはないではないか。何故もつと上を向いて、何故もつと明るい目で、安心して、平氣で私を見ては呉れないのか。何故もつと親しむ心を持つては呉れないのか。

二

もとより、こちらにも責任があらう。しかし、それは暫く後まわしの問題として、子供の中に此の親しむ心の發達を阻害せられて居るもの、あることは事實である。而して此の事實が、其の子の現在にとつては勿論、其の將來に對しても、甚だ不幸なことであるといふことが、從來餘り重く考へられて居ない感がある。そんなに心配しなくてもいゝ子供のいたづらや不行儀などはかりが問題にされて、此の人の子として一番に貴く美しい天眞の情性の教育が往々にして忘れられ勝ちなのは、教育の誤謬といはうか、教育者の淺薄といはうか、確に一つの缺陷である。

人間對人間の關係は、上に下に横に或は斜めに、頗る多趣多様である。しかも、其の共通の根底は親しみである。親しみの種々のあらはれが其の時其の場合に適當した心狀と態度との區別を必要とするはいふ迄もないけれども、それは總て、親しみの根に咲く花のいろ／＼である。其の花の色や

形はさまざまであつても、其の生きたうるほひは皆此の根ばかりから湧く、親しみのない尊敬、親しみのない慈惠、親しみのない協和、そんなものは無い筈であるが、若しあつたら、それは作り花の様なものである。根のない處に花は枯れる。親しみのない處に人間は枯れる。自分も冷く、人も冷く、世も冷く、一切が冷く枯れる。

勿論人生は理想の樂郷ではない。うっかり親しんで、どんな苦い目にあふかも知れない。世間萬事用心のこと、言ふ説もあるかも知れない。それも頗る尤もなことであり、又大切な注告である。實際、人を鑑る賢さは、人に對する親しみの心の次に一番大切なことである。しかしそれは、夜道を急ぐ主人の爲の提灯である。走る船の爲の水先案内である。強く／＼豐潤に人を親しむ心があつての上の賢さである。況んや、提灯ばかり先きへやつて、自分では出懸けられない萎けた主人、水先案内ばかりを苦勞して、どこの港へも入り得な

い船。そんなものに何の價值があらう。徒に用心深く、人を氣遣ふ心や、無暗に遠慮々々と氣兼ねばかりが先きに立つ性や、こんな習癖のそれ自らに何の價值があらう。ましてや、明日すぐ六かしい世間といふものへ出るのではなし、大膽に豊満に、天を親しみ、地を親しみ、人といふ人のすべてに親しみ得るのが、眞に子供の幸福で、而して特權といふものではないか。

### 三

人に親しむ心は、人に親しむの經驗によつてのみ養はれる。人は親しむべきものだと思へても、人は親しいものだと思き聞かせても、恐らくほんとうの味は分らない。味は味はつてのみ分る。若し親しむの心に於て缺くる子供があつたら、その子に人を——私を親ませ、味はせるの他はない。これが此の點に關する唯一の教育法である。教育者が、心得て居なければならぬ教育の秘訣はいろくある。しかも、その中で一番肝心なのは此の

子供に自分を親ませる秘訣である。しかも。これは秘訣といふには、餘りに其の人に<sup>つ</sup>着いて居ることである。寧ろ教育者の資質といつた方が適當であらう。又、方法といつても、強ひてする世辭や愛嬌で出来ることではない。寧ろ其の人自身が、先づ親しむ心を持つて居て、それから出る暖かさ、柔かさと言つて何よりも其の眞實が子供を引きつける他はない。